

群 教 セ	I01 - 04
	令 6.287集
	特 - 知的障害

自分の思いをもち、友達を意識して 表現できる児童の育成

——視覚支援による学習の振り返りの工夫を通して——

特別研修員 遠藤 麻希子

I 研究テーマ設定の理由

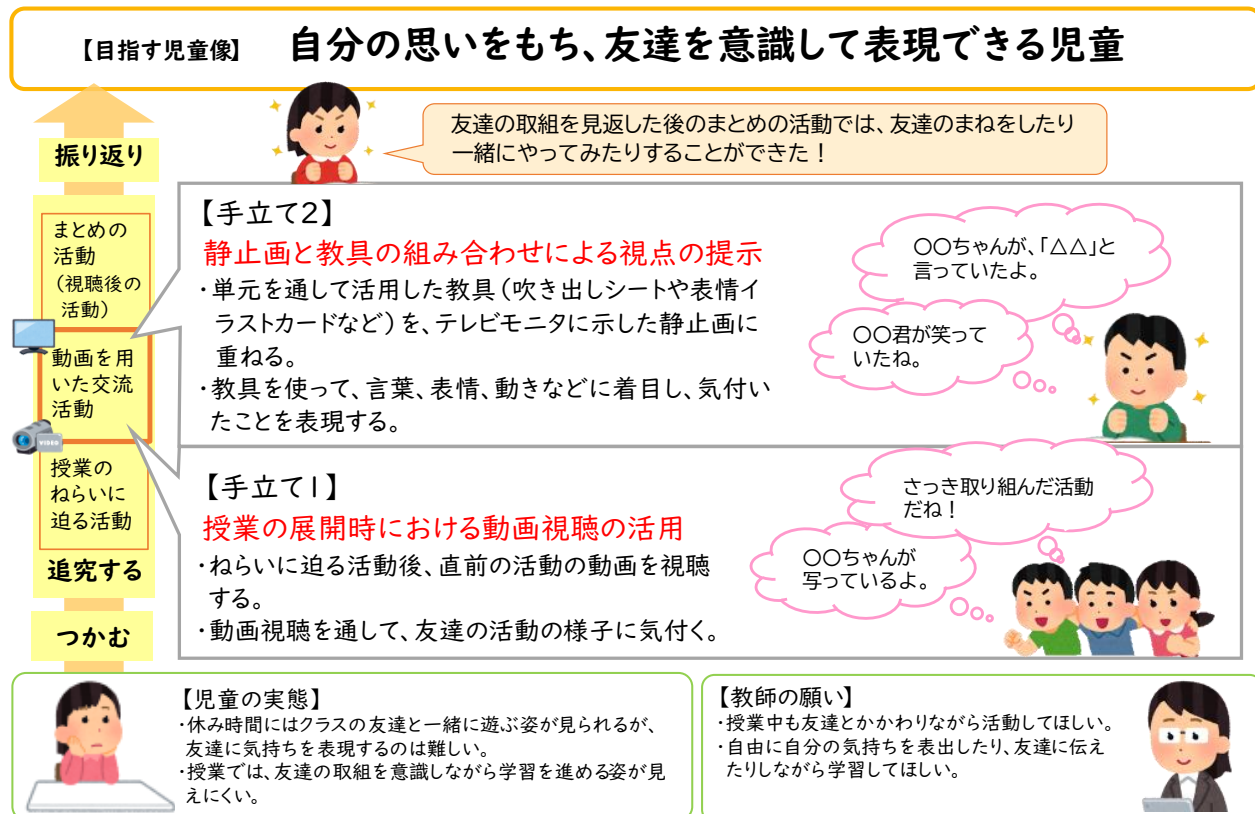
中央教育審議会（令和3年）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』（中教審第228号）の中で「協働的な学び」の重要性が示され、特別支援学校学習指導要領（平成30年3月告示）解説総則編には「個性を生かし多様な人々との協働を促す」ことが明記されている。また、特別支援学校小学部学習指導要領（平成30年3月告示）解説国語科編の目標には、「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け，思考力や想像力を養う」とあり、協働的に学び友達と伝え合う力の基礎を育むにあたり、国語科の果たす役割は大きいと考える。

研究協力校の小学部1年生の児童は、クラスの友達の存在に気付き、休憩時間に一緒に遊ぼうとする様子が見られるが、気持ちを表現することには課題がある。さらに授業では、友達の取組を意識しながら学習を進める姿があまり見られない現状がある。

そこで、授業において体験的な学習活動を取り入れ、その活動の様子を友達同士で振り返ることで、児童がお互いを意識し、自分の思いを表現できる児童を育成できるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



【児童の実態】

- ・休み時間にはクラスの友達と一緒に遊ぶ姿が見られるが、友達に気持ちを表現するのは難しい。
- ・授業では、友達の取組を意識しながら学習を進める姿が見えにくい。

【教師の願い】

- ・授業中も友達とかかわりながら活動してほしい。
- ・自由に自分の気持ちを表出したり、友達に伝えたりしながら学習してほしい。

2 研究上の手立て

目指す児童像に迫るため、魅力的な教材・教具の準備や体験的な活動の設定をベースに、視覚支援による学習の振り返りの工夫として以下の手立てを設定した。

手立て1 授業の展開時における動画視聴の活用

授業のねらいに迫る体験的な活動の動画を撮影し、活動後すぐにその動画を視聴する。その際、児童たちが動画を見て思ったことや気付いたことを表現する交流活動を行い、動画視聴を通して友達の活動の様子に気付けるようにする。

手立て2 静止画と教具の組み合わせによる視点の提示

動画視聴の中で、ねらいに迫る活動場面の静止画を提示し、そこに授業や単元を通して活用している教具を重ね合わせて、交流活動の視点を提示する。例えば、教師は、静止画に吹き出しシートを重ねて、友達が何と言っているかに目を向けさせたり、表情カードと静止画の表情を比べて、活動に取り組む友達の言葉や表情、動きなどに着目させたりして、互いが気付いたことを表現できるようにする（図1）。その際、児童同士でやりとりする姿が見られた場合には、同じ教具を用いて関わり合えるように、教師は支援したり見守ったりする。



図1 教具を用いて、視線に注目させている様子

Ⅲ 実践例

1 単元名 「まねしてみよう」

題材名 「くまさん くまさん」『こくご☆（文科省著）』（第1学年・2学期）

2 本題材について

本題材はくまと子供が出会い、握手をしたり一緒に跳躍したりして遊び、「さようなら」と挨拶をしてお別れをするという話である。加えて、「くまさん くまさん」と繰り返す、わらべ歌独特の言葉の響きやリズムを感じることでできる文章であり、くまと子供の動作が生き生きと描かれている。この題材で学ぶ中で、児童たちが絵の内容に興味をもち、読み聞かせを楽しむとともに内容を大まかに把握し、教師の話し掛けに応答することができるようになることが期待できる。また、児童がくま役になり、物語の一場面を簡単な言葉で唱えたり動作化し、「あっぷっぷ」「いっしょにびよん」などと言う場面では教師や友達とタイミングを合わせて台詞を言ったり、動作を模倣したりすることで言葉の響きやリズムを楽しみながら発語を促し、言葉の定着を図っていく。

それらを通じて、相手に意思を伝える言葉を考えたり、届きやすいように声の大きさを変えたり、体を大きく動かして伝えたりしようとする態度を養うことができると考え、この題材を設定した。

これらを踏まえて、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 昔話などについて、読み聞かせを聞くなどして親しむことができる。（知識及び技能） (2) 教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりすることができる。（思考力、判断力、表現力等） (3) 言葉で表すことやそのよさを感じるとともに、言葉を使おうとする態度を養うことができる。（学びに向かう力、人間性等）	
評価 規 準	(1) 昔話などについて、指をさしたり声を出したりしながら読み聞かせに親しんでいる。 (2) 教師の話や読み聞かせに応じ、音声を模倣したり、表情や身振り、簡単な話し言葉などで表現したりしている。 (3) 言葉で表すことやそのよさを感じるとともに、言葉を使おうとしている。	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1・2時	・休憩時間に友達と遊んでいる動画や写真を見て、普段の友達とのやりとりを振り返る。 ・題材の読み聞かせを聞いておおよその流れを捉えたり、題材に出てくる登場人物などの動きや言葉を確認したりする。

追究する	第3時	<ul style="list-style-type: none"> ・児童とくまの役に分かれて役割演技を行い、動きや言葉のまねをする。 ・役割演技をした動画を見て、様子を振り返る。
	第4・5時	<ul style="list-style-type: none"> ・ハロウィンや好きな絵本を題材として、新しく考えた動きや言葉を提案したりまねをしたりする。 ・一緒に活動したい友達を選んだり、クラスの人々に対して発表したりする。 ・活動した動画を見て、気になるところを指さしたり思ったことを言ったりする。
まとめる	第6時	<ul style="list-style-type: none"> ・題材を通した活動の動画を振り返り、自分の思ったことや感じたことを表現する。 ・学校生活の中でのやりとりの中から友達の様子を見て、拍手したり指さしをしたりして気持ちを伝える。

3 授業の実際

本時は全6時間計画の第4時に当たる。児童の自由な動きや気持ちをより引き出すために、前時に学んだことを踏まえ、児童の実態に合わせてハロウィンをテーマにして授業を行った。研究のねらいを達成するために講じた手立てと児童の様子を以下にまとめる。

(1) 手立て1について

学習のねらいに迫る活動として、お化けの動きや言葉を考えたり、まねしたりする活動を設定し、それを動画で見返して気付いたことや思いを交流した後、もう一度、学習を深める活動に取り組む流れで授業を組み立てた。学習のねらいに迫る活動では、ハロウィンの活動の周知と物の名前ややりとりの仕方を押さえて、児童はお化けや魔女になって自由に動き回った。この活動後の動画視聴では、児童Aが帽子をかぶる様子を見て児童Bが「ぼうし」と言って頭を触ったり、児童Bが手招きをしている姿を見て児童Cが「やらない」と自分の気持ちを改めて言葉にしたりすることができた。このようにして、動画を観ながら友達の様子に気付き、自分の思ったことを表現しようとしたことができた(図2)。



図2 画面を指さす様子

(2) 手立て2について

手立て1と並行して、友達の動きや言葉、表情などに着目して表現できるように、静止画と教具の組み合わせによる視点の提示を行った。教師が静止画に教具を重ねて児童に問い掛けたり、児童がすぐに教具を手にとることができるようにしたりしたことで、児童が自ら吹き出しシートや表情カードを手に取り、静止画に当てる様子が見られた(図3)。友達が何か発言している場面や児童同士がやりとりをしている場面を教師が取り上げると、児童は吹き出しシートを手を取ったり、友達が笑っている場面や顔を見合っている場面を教師が取り上げると、児童は表情カードを手を取ったりしながら、言葉や身振りなど自分の表現方法で教師や友達に伝える様子が多く見られた。また、吹き出しシートを静止画に重ねて「Cさんは何と言っていたかな」と尋ねると、児童Cは「どうぞ」と言って自分の発言したことを覚えていて答えることができた。細かい表情のニュアンスを伝えることが難しい児童Bは、友達の表情に注目し、「かお」と言うことで友達の表情や気持ちに気付いているということを伝えようとしている様子があった。



図3 静止画に吹き出しシートを当てる様子



図4 友達にほうきを渡そうとしている様子

これらの手立てを通して、児童のやりとりの発展や友達の取組をまねする姿を期待し、動画視聴後の活動を行った。動画視聴を経て活動の見通しがもてたことで、児童の動きが大きく活発になったり、「一緒にやろう」と友達を誘ったりする姿が出ていた(図4)。「ゴーゴーしてる(追いかけた)」と児童Cが言ったり、児童Aが腕を前後に振って走ったことを伝えたりするなど、動画視聴前よりも友達の表情や動きに関する表現が多く見られた。

(3) 考察

手立て1では、学習のねらいに迫った活動の後、すぐに動画視聴による振り返りの交流活動を設定するという授業の流れができ、児童たちは交流活動の見通しをもちやすくなった。この中で、それぞれの児童に「次はこうしてみよう」「友達の〇〇をまねしてみよう」などの気持ちが生まれ、交流活動の際には自分から気持ちを表現する力を引き出していたのではないかと考える。つまり、学習のねらいに迫る活動の動画視聴をしたことは、児童たちが本時の中心的な学習内容を押さえるだけでなく、自分や友達の活動を動画で俯瞰して見る機会となり、児童がこれまでに気付かなかった自分や友達の言葉、表情、動きに気付くことにつながったのではないかと思う。

手立て2では、友達が活動に取り組んでいる場面の静止画を見て、吹き出しシートなどの教具を当てる児童の姿が見られたことから、静止画と教具を組み合わせたことは、静止画を見て思ったことをより意欲的に表現したり伝えようとしたりする姿を引き出したと考えられる。特に、喜怒哀楽がはっきり表れている友達の表情の静止画では、児童が「かお」と言って、それに合った表情カードをケースの中から探し出したり、画面に映る顔をしきりに指さしたりしていた。

これまでの授業における動画視聴による振り返りは、授業の導入や終末段階での、学習の動機付けやまとめとして取り入れることが多かった。しかし、展開段階で動画や静止画を活用し、更に活動で使用した教具などを用いながら友達の言葉や表情、動きなどに着目して振り返りをすることで、児童たちは具体的に何を振り返ればよいのかを理解して、自分の気持ちを表現しながら活動を行うことができたと考える。

IV 研究のまとめ

1 成果

動画視聴の際に、学習のねらいを押さえるとともに、児童同士の交流活動を促す中で、発言だけではなく、発声や視線、身体の動きなどの自分なりの表現を引き出しながら自分の気持ちを伝えるようにしたことで、目指す児童像に迫る姿を見取ることができた。さらに本単元の学習で扱った「吹き出し」などの教具を動画視聴での交流活動の際に繰り返し活用したことは、児童が友達の言葉や表情に意識を向けたり自分の思いを表現したりすることができ、自分の気持ちを容易に表現するために非常に有効であった。その結果、拍手をしたり指をさしたり、ハンドサインを出したりするなど、相手を意識して行う動作が多くなった。この活動を継続することで、今後は友達に自分の気持ちを伝えようとする姿につながっていくと考える。

2 課題

研究当初は児童同士が相互に自分の気持ちを伝え合う姿を引き出すことをねらいとしていたが、本実践ではそこまでは至らなかった。実践を進める中で、児童が自分の思いを表現する姿を引き出すための手立ては試行錯誤しながら講じてきた。交流活動を通して、その思いを友達に対して伝えるというところまでねらったが、今回の手立てでは、そこまでの児童の姿を引き出すことは難しかった。

このように考えると、交流活動において「友達に対して伝える」ことを意識した手立てを講じ、例えば、発言が難しい児童には絵カードの選択や教師が代弁して伝えるなどして、児童同士のやりとりを丁寧に行うことで、動画視聴後の活動では、友達に向けた発言や身振りなどの表現をもっと引き出したのではないかと思う。また、このような活動を継続することは、日常生活での自分や友達同士との関わりの中で、豊かに自分の思いを表現することができるようになると考える。